View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kansai University Repository

関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

「防災の日」のメディア史：日本社会における災害認識の変遷［全文の要約］

著者	水出 幸輝
発行年	2018-09-20
学位授与機関	関西大学
学位授与番号	34416甲第695号
URL	http://doi.org/10.32286/00017606

本論文は、日本社会における自然災害の集合的な認識の変容過程をマス・メディアの通時的な検討によって明らかにするものである。過去の災害がどのように語られたり、語られなかったりするのか、という問題について、災害間、地域間、時代ごとの比較を通じ、検証している。記憶認識の時系列的変容と共時的位相差を浮き彫りにし、その背景を読み解いていくことが本論文の課題である。

東日本大震災（2011 年）の後、災害の記憶をいかに後世へと残していくかが社会の重要なテーマとなり、災害の記憶を残す営みが注目を集めていた。しかし、議論の中心は東日本大震災か阪神・淡路大震災（1995 年）である場合がほとんどで、これら 2 つの災害の記憶を今後どのように残していけばよいか、という議論に終始している。1995 年以前に発生した巨大災害がこれまでどのように記憶されてきたか、あるいは、どのように忘却されてきたかを問い直していく作業には手が付けられてこなかった。

膨大な蓄積がある戦争の記憶研究に対し、災害の記憶研究は多くない。従来の研究は、通時的な関心を持たず、発災直後の資料をもとに集合的記憶の構築過程を論じるものが多い。メディアによる周年的な想起、メディアと災害の長期的な関係については十分な検証が行われてこなかった。災害を対象としたメディア研究は災害情報についての研究が主流である。人文社会系の災害研究は発災に時間的にも空間的にも限定された研究が大部分を占めていた。

こうした先行研究の動向を踏まえ、本論文では 1923 年の関東大震災と 1959 年の伊勢湾台風を研究対象に設定した。どちらも日本災害史において重要な位置を占めており、発災から 50 年以上が経過している。長期的な時間軸を設定し、地域と災害間の比較を踏まえながら、記憶認識の変容過程を検証することが可能である。この 2 つの災害について、主に新聞報道の検討を行った。

本論文は、各 2 章の 3 部から構成されている。1960 年の「防災の日」制定前後で時代を区分した。

第 I 部では「防災の日」制定以前における関東大震災の記憶認識について検討している。

第 1 章では、1930 年 3 月末に開催された帝都復興祭の報道に注目した。関東大震災からの復興を祝う帝都復興祭は、復興語りの終点、記憶語りの始点として位置付けることができるものである。復興の完了により、関東大震災は現在形の問題ではなくなり、以降、過去のものとして語られていく。これまでの研究においても帝都復興祭への言及はみられるが、東京における盛況を描くのみで、同時代の横への拡がり、他都市で受容については検証されていなかった。こうした問題を鑑み、帝都復興祭に関する報道を東京と大阪の紙面で比較分析を行った。帝都復興祭が全国的な催しとはならず、東京の内部で完結し、東京の帝都としての自意識を刺激する祭典であったことを明らかにしている。1930 年の時点で、東京と大阪の間には関東大震災に対する認識に差異がみられた。

第 2 章では、1930 年から 1960 年における「震災記念日」の報道を対象としている。戦前・戦中・戦後という時代とのかかわりで関東大震災がどのように想起されてきたかについ

て、東京と大阪の紙面を比較検討した。「震災記念日」には、慰霊祭と同日行われる防空・防火訓練、非常変災防備演習の記事が掲載されていた。死者を悼む慰霊と、被災体験を現在形の問題に接続する動きが同居している。ただし、東京と大阪ではその有り様に違いがみられた。特に 1939 年に第一回の「興亜記念日」が「震災記念日」と同じ 9 月 1 日に設定され、東京の「震災記念日」は戦時体制に動員されていったが、大阪では動員する記憶がほとんどなかった。また、終戦を経て、戦時体制が解体されると記憶を動員するシステムがなくなった。そのため、東京においてですら、「震災記念日」の周年報道は量的にも質的にも忘却へと向かっていった。関東大震災は東京ローカルかつ薄れゆく記憶として語られるようになっていた。

第 I 部の検討からは、現在ナショナルな記憶として位置付けられる関東大震災の記憶が、「防災の日」制定以前にそのような地位を占めていなかったことが明らかになる。そればかりか、被害が甚大であった東京においてでさえも次第に忘れられつつあった。

第 II 部では、「防災の日」制定以後の災害認識について検討している。1959 年の伊勢湾台風を契機として、9 月 1 日の「震災記念日」には「防災の日」という新たな意味が付与された。これ以降、9 月 1 日の新聞には防災を語る社説が掲載されるようになるが、このことが関東大震災の記憶認識に重要な変化をもたらした。

第 3 章では「防災の日」創設の経緯を明らかにし、「防災の日」制定以前を含む 1924 年から 2014 年における関東大震災の周年社説を東京・大阪・名古屋の紙面で比較分析を行った。「防災の日」制定以前、「震災記念日」に社説が掲載されることはほとんどなかったが、「防災の日」が設置されたことで、9 月 1 日の社説では災害が語られるようになった。9 月 1 日がもともと「震災記念日」であったことから関東大震災への言及が多く、当初は「忘れそうな記憶」として言及されていたものが、次第に「自明な記憶」へと転換する。関東大震災の記憶はナショナルなレベルで再構築された。第 3 章ではこの過程を跡づけている。なお、伊勢湾台風は「防災の日」の契機であるにもかかわらず、全国紙の社説ではほとんど言及されていなかった。

第 4 章では、「防災の日」制定の契機である伊勢湾台風の周年報道を扱う。1960 年から 2014 年を対象に、東京・名古屋で比較分析を行った。「防災の日」制定の契機である伊勢湾台風は、関東大震災の記憶がナショナルな記憶として再構築されるきっかけであった。しかしながら、「防災の日」の社説では言及されていなかった。第 4 章では、伊勢湾台風の記念日である 9 月 26 日の報道を通時的に検証したが、全国紙は 9 月 26 日に特別な意味を付与してはいなかった。しかしながら、在名古屋新聞社は周年報道によって、伊勢湾台風の集合的な想起を促している。伊勢湾台風を地域の重要な記憶として位置づけていた。このことから、戦後最大の被害をもたらした伊勢湾台風が全国的には忘却され、ローカルな記憶として構築されていることが明らかになった。

第 II 部の検討からは、「防災の日」の制定によって関東大震災がナショナルな記憶として再構築され、現代的な認識を獲得する経緯について明らかにした。そして、この背景には伊

勢湾台風という巨大災害の集合的な忘却が存在していることを指摘した。

第Ⅲ部は、第Ⅱ部と同様に「防災の日」制定以後の期間を中心としている。ただし、異なる視角・方法を採用することによって、日本社会における災害認識の変遷についてより立体的な把握を試みた。

第 5 章では過去の認識である記憶との対応関係で、未来の災害に対する想像力について検討を試みた。注目したのは科学的地震予知についての報道である。「防災の日」制定以来、関東大震災の記憶がナショナルな枠で再構築される過程とパラレルに、科学的地震予知に対する注目度が高まり、防災体制が整備されていった。特に、東海地震の科学的予知を前提とした「大規模地震対策特別措置法」が成立する 1978 年までの期間に注目し、科学的地震予知に関する報道の検証を行った。地震防災対策推進のために地震の記憶が持ち出され、起こりうる地震への想像力が喚起される、という記憶と予知の相互参照関係を指摘している。

第 6 章では、「メディア知識人」と称される清水幾太郎の震災語りに注目した。清水は関東大震災の被災体験を持ち「地震後派」を自称する人物である。関東大震災のイデオローグ的存在であり、集合的記憶を議論するうえで欠くことのできない対象であるが、清水の震災語りの変遷についてはこれまで把握されてこなかった。清水の震災語りの変化とその背景を精緻に読み解くことで、個人的な記憶と集合的記憶の連関について検証した。清水は終戦以前にほとんど震災を語っていなかったが、終戦を経て、戦争との対応で震災を語りはじめる。しかしながら、この時期は被災体験が他者に理解されるものとは考えておらず、私的な体験に閉じた語りとなっていた。大きな変化が生じているのは、1970 年頃である。社会や国家の問題として関東大震災の被災体験を語るようになっていた。関東大震災がナショナルな記憶として定着し、科学的地震予知への期待が高まった時期と重なっている。清水は社会の変化を敏感に嗅ぎとり、語りのスケールを変化させていた。

第Ⅲ部では、関東大震災の記憶認識の変化と科学的地震予知に関する議論の対応、知識人の震災語りの変容を明らかにした。1960 年から 1970 年代後半は、伊勢湾台風を集合的に忘却し、関東大震災の記憶を再構築しただけでなく、起こりうる地震の脅威が積極的に語られた時代であった。

終章では、日本社会における災害の記憶語りを再整理し、過去との相対化によって、現代社会における“災害の記憶”の布置を考察している。われわれが震災の記憶を重要視しがちな背景には、1960 年から続く、記憶の構築と忘却のせめぎ合いが存在していた。